

佳作

あの瞬間

兵庫県 鳴尾高等学校一年 中田 優芽

「中田優芽。」

どうどうこの瞬間がきた。人生で一度きりのこの瞬間。私は顧問の高木先生に名前を呼ばれた。

「はい！」

と力をふりしぼって涙のせいで震えた声で返事をし、私はおもいきり走って先生の胸に飛び込んだ。

「三年間最後までよく頑張ったな。高校でも頑張るな。」
私はこの言葉を一生わすれることがないだろう。

私は今でも時々その瞬間を思い出す。そして今思い返せばその瞬間に至るまでにはたくさんの大きな壁があった。毎日の練習の中で怒られない日は一度もなかったし、逆にほめられる日はめったになかった。休みも全くなくて、やめたいと思う時がたくさんあった。しかし、それでも私はこの部活を続けることができた。それができたのは仲間の存在が大きかったと思う。私の周りには、いつ、どんな時でも大切な仲間がいた。一緒にパート練習をしたり、音を聞き合ったあの瞬間。お

互い注意とアドバイスを言い合った。「同学年でも注意するん!?」と驚かれたことがよくあった。私も最初はためらっていた。それでも注意し合えたのはどうしてだろうか。それは本当にお互いを信じ合っていたからだと思う。

そして大会に出たあの瞬間。本番の寸前まで笑い合って緊張をほぐし合った。落ち着いて演奏できたこともいつも隣にいた仲間がいたからだ。結果が良かった時は一緒に叫び合って嬉し泣きし、結果が出なかった時には、抱き合って泣いた。そんな風に、何でも言い合い、聞き合えたり、一緒に喜びや悲しみをわかち合える仲間こそが、本当の仲間だと思う。そしてそんな最高の仲間がいたからこそ、これら一つ一つの瞬間がよりいっそう感動するものになったと思う。

話は元に戻るが、「三年間よく頑張ったな。高校でも頑張るな」その言葉を聞き、私は前に出て、「ありがとうございます」と大きな声でお客様に向かって叫び、頭を下げた。そしてゆっくりと顔を上げると、そこにはもう二度と経験できないであろう景色といっぱいの拍手が広がっていた。いつも学校で「頑張ってるね」と応援してくれた友達や、毎日かかさずおいしいお弁当を作ってくれたり、家で誰よりも応援してくれた親の顔が見えた。いつも当たり前のように来ていたホールだったので、何気に見ていた景色だったけど、普段と違い、自分

にだけ当てられるスポットライトは、とても明るくて、目の前はいつものホールと思えないほどキラキラして見えた。それは私が人生の中で見た景色の中で一番きれいで、感動するものだった。

そして後ろを向けばそこには今まで一緒に頑張ってきた仲間が並んで立っていた。泣いているみんなの顔を見ると余計に涙が出てきた。その涙は大会で勝った時の嬉し涙でもなく、負けた時の悔し涙でもなく、いつもとは何か違うものだった。ぬぐってもぬぐっても間に合わないくらい、次から次へと出てきた。何があっても、絶対に泣くことがなかった部長さえも泣いていた。

私達の学年は先輩方とは違ってあまり良い成績を残すことができなかった。座奏では、関西大会で金賞を取ったものの、地区大会ではグランプリをのがしてしまったし、マーチングの方では全国大会で銀賞と、四年連続金賞だった伝統をこわしてしまった。本当に、応援してくださっていたファンの方々や私たちの先輩、後輩、そして先生に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。しかし先生は、

「お前らは伝統をこわしたなんて思わなくていい。最後の定期演奏会で自分達が納得いくベストの演奏をすればいいねん。」

と言った。そうだ。私達は忘れていた。吹奏楽に関わらず、大切なのは結果でなく、どれだけ聴いてくださるお

客様に感動を与えられるかだ。そして自分達がベストの演奏をできたと思うなら、きっとお客様にも感動を与えられるのだと思う。それを教えてくれたのは、顧問の高木先生。そして、大切な上甲子園中学校の仲間達だ。「中田優芽」と呼ばれたこの瞬間。そして、たくさんの感動をわかち合えた大好きな仲間達を私は一生忘れることがないだろう。